

新しい年を迎える準備で先生も走る「師走」の風物詩

1 「シワス」は「年ハツル」時でありめでたい時

一年で 12 月のことを師走といいます。「しわす」と読みます。昔の言い方で 12 か月のうち「月」という漢字がついていないのは「弥生」（3 月）と「師走」（12 月）の二つの名前だけになります。「弥生」というのは「弥」（いよいよ）、「生」（茂る、生える）ということで、草花などが芽を出し生い茂る「春」の季節の到来ということがこの月の呼称になったのです。

では「師走」はどうしてそのような呼称になったのでしょうか。

もともと、12 月のこの時期のことを「シハス」と呼称していたようです。「十二月（シハス）には 沫雪降ると 知らねかも 梅の花咲く含めらずして」と万葉集巻第九～一六四八にあり、万葉集の頃にはすでにこの月のことを「シハス」と呼んでいたことがわかります。日本書紀には「十有二月」と書いて「シハス」と書いてあります。この「シハス」の語源は今のところよくわかっていません。諸説あるのですが、日本書紀や万葉集の時代に先生がいるということも少ないので、少なくとも「師走」という漢字は、近代になってつけられたものであるようです。実際に「師走」という表記は元禄時代頃から使われており、ちょうど江戸の文学が最盛期であったときに、言葉遊び的に世相を表現したものであろうと考えられている。

現在有力であるのは、

「年果つ」（一年が果てる、要するに一年が終わる）で「トシハツ」、
または「四極」（四季が極まる、要するに四季が果てる）で「シハツ」、
または「為果つ」（なすことが果てる、要するに今年一年でやるべきことが終わる）で「シハツ」

という単語が語源ではないかといわれているのです。

要するに、一年の終わり、または四季の終わり、または為すべきことの終わり、ということ、この呼称が使われていたのではないかと考えられているのです。

よくはわかりませんが、たぶん、この三つのすべてが「シワス」といわれたことの語源ではないでしょうか。

ここで「果てる」という単語を使い、「終わる」という漢字を使わなかったのですが、このことを少し解説してみましよう。「果てる」というのは、「一定期間続いていたことが終

わる」ということです。終わりという、そこですべてが終わってしまうという感じで、続きがないということになりますが、果てるという単語は、一度終わってもう一度次につながるという意味があるのです。植物が育った時の一つの終わりは「果物」です。まさに、植物の最盛期が「花と葉」であるとする、その一連のつながりの終わりが「果てた物」要するに、「果物」になるのです。だから、一年で植物そのものの寿命が終わってしまう稲などに関しては、「果物」とは呼ばず、多年草または多年樹木の実を「果物」と呼ぶのです。

一年も、そこで終わってしまうわけではありません。当然に来年を良い年で迎えなければならないのです。そういう意味を込めて次の一年につながるという意味で、「一年が終わる」ではなく「一年が果てる」という言い方をしていたのです。このようになったのは、「ハテル」という音が「ハツ」要するに「初」や「発」という音と似ているということと無縁ではないのではないかと考えられています。新たな年の「初」まり、新たな年の「出発」の前に、「ハツル」という言葉を使うのです。これは、我々が宴会が終わるときに「終わり」と言わず「お開き」という単語を使うことと似ているのではないのでしょうか。ある意味で「ハツル」ことは、無事に一仕事終えたという意味であり、次の期間の始まり、新たな門出の直前という意味で「めでたい」という感覚を持っているのです。

2 「師」が「走る」という漢字があてられた江戸時代の世相

日本人の悪い癖で、語源というものにおいて「これが語源である」とすると、「他のものはニセモノ」としてしまい、無視してしまう習性があります。もちろん、日本人の本物を求める探究心というのは、このようなところで形作られ、そのために日本は発展してきたのであると思います。

しかし、言葉や文化というものは、その時の世相を映す鏡です。当然に言語や言葉は、本来の意味ではなく、いつの間にかその文化やその時の世相を反映して変化してゆくことになります。要するに、「シワス」が本来「年果つ」であったとしても、それが元禄の時代に「師走」という漢字があてられた背景が、そこに存在するのです。要するに、江戸時代の世相としては12月は、「一年が無事に終えてめでたい」という感覚ではなく、「師が走らなければならない」というような年末に変化していたということになります。そこには時代の差や、この言葉を使っていた人々の感じ方が変わったということの意味しているのではないのでしょうか。

では、江戸時代の「師走」はどんな感じだったのでしょうか。

師走とは「師馳月」（しはせづき）なのだそうです。これは、「一年が無事に終わりました」という「年果てる」という感覚で、それがめでたいということから、そのことを先祖に感謝し、祖先霊を弔うようになったのです。現在でも、新しい年を迎えるにあたって、先祖のお墓を掃除する光景を見ますが、それはまさにこのような習慣から、祖先の霊のいるところもきれいしましょう、ということからなのです。これは、「年果てる」と言ってい

た奈良時代や平安時代では、貴族の風習であり、その貴族は、都の周辺に寺院が山ほどありますから、その寺に行って一緒にお経を唱えたり護摩をあげたりすることで行われていました。今年も、テレビで年が変わるときの神社仏閣の様子を映すと思いますが、その中で有名な寺院で僧侶が集まってお経を唱えている姿を見るのではないのでしょうか。まさにこれが「年果てる」時のめでたい感覚と祖先霊を弔う儀式なのです。

しかし、これが鎌倉室町時代では武士の世界に、そして江戸時代には、庶民の中にもそのような風習を行うようになってくるのです。これでは、お坊さんの人数が足りなくなってしまう。しかし、その時の貧富の差はあっても先祖の霊や仏様には、貧富の差はありません。そのために、みな平等に行わなければならない。お坊さんは、自分の檀家のすべての家々を忙しく走り回らなければならないようになってしまうのです。

普段は、落ち着いて座ってお経を唱えているお坊さんが、この時ばかりは、走り回って檀家を回らなければならない。それも「年果てる」時であるから、新年にかかってはならない。当然に、お寺に戻って、寺の仏様にもお経をあげなければならない。その風景を風刺して、「師馳月」、要するに「法師」が「馳せる」月というような当て字を使うようになったというのです。

この当て字は、まさに、江戸時代になって、数百年前の貴族や武士の風習が、徐々に庶民の世界に移ってきたことを意味します。これは、それだけ庶民が裕福になり、生活にゆとりが出てきた、そして、先祖の霊や一年の風習に関して心を配れるような余裕が出てきたということの意味するのです。庶民が、「年果てる」というような感覚がなかったのではなく、より一層、庶民が自主的に自分たちの風習で物事の呼称を選ぶようになった、自分たちの風習を合わせて、感覚的に理解できるものの方を選ぶようになったということではないのでしょうか。

ある意味で、語源そのものとは違いますし、単なる当て字であるといわれていますが、その言葉の変化の中に、日本の文化や日本の庶民の生活の豊かさ、心の豊かさなどが溢れている、生活に密着した言葉の変化ではないのでしょうか。

3 「お坊さん」から「先生」へ変る「師」をめぐる世相

時代の流れとともに、徐々に「師走」という単語が独り歩きし、さまざまな人が走り出すようになります。江戸時代後半から昭和初期までは「師」という漢字の表す通り、自分の師匠、要するに先生が走るということに意味が捉えられるようになりました。「先生」というものは、時代劇などを見ても、いつも威厳をもち上座に常に座っているイメージがあります。走っているというのは、威厳に満ち溢れた態度ではありません。あわてていたり逃げたりというのが走る原因になるのですが、本来、先生であれば、走ったりせず、事前にすべて準備をしているというイメージがあるものです。その先生が走らなければならないというのが年末であるということになります。

最近では、先生が走るといってもあまりイメージがわきません。そもそも威厳に満ちた先生が、少なくなってきたのかもしれませんが。お坊さんは、走るどころか、袈裟を着たままバイクに乗っているような方もいるので、そもそも世相がかなり変わってきてしまったのかもしれませんが。語源ではないかもしれませんが「師走」という漢字をあてたことによって、昔の先生やお坊さんの威厳や普段の日常を垣間見ることができるのです。

逆に、このような当て字が庶民の間で流行し、使われるようになったというのは、同時に、「お坊さん」よりも、「先生」に対する年末のあいさつということが徐々に定着したということもあるのではないのでしょうか。江戸時代末期になると「よみ・かき・そろばん」が町人から農民まで多くの人ができるようになり識字率は非常に高くなって来ています。それだけ、町人の間にも「先生」という存在が大きくなったといえるのではないのでしょうか。同時に、現在も日本に残る「お歳暮」などの習慣が発生するのも、この時期です。お世話になった人に、今年一年の感謝をこめて品物を持ってあいさつに行くという風習が、遠方の人に対して挨拶状と名物を送るという習慣と合わさったのがお歳暮です。お世話になった「師」にあいさつ周りをする。それは、先生であっても同じだったのでしょうか。民間の先生は、自分の先生にあいさつに行かなければならないし、自分の生徒のあいさつを受けなければなりません。それは、それはさぞかし忙しかったのではないのでしょうか。

いずれにしても「普段は走らない人」が「走る」という意外性があり、逆に普段は走らない人も走るほど忙しい、またはあわてなければならぬ事情があるというのが江戸時代以降の面白さがあったのではないのでしょうか。普段は威厳に満ちて「面白くない」と思っている先生の態度も、このようなときに季節の名前として「意外性」を表現し、そのうえで、「自分たちと同じ部分もあるんだ」という意識が身につくことによって、また一つ地域社会が、笑いや風刺の中で一つにまとまっていたのではないのでしょうか。

現在では、先生が走るなどというのは当たり前になってしまっていますし、先生に対する尊敬の念などというものが徐々に薄れてきてしまっているかもしれません。逆に「師走」という単語もあまり使わなくなり、年末というのにクリスマスのイルミネーションばかりが目立つようになってしまいました。もちろん、それが世相の変化であり、「年果つ」が「師走」に代わってゆくと同じように、時代の流れなのかもしれません。江戸時代には、認められなかったキリスト教のお祭りを、日本人は宗教と関係のないイベントとしてとらえるようになっていきます。このような現象も百年のちには、このように分析されるようになるのかもしれませんがね。

4 烏と師走と神の使い

逆に、このような「師走」という漢字があてられることによって、先生ですら走ってしまうほど忙しい、あわてなければならぬということが、社会的に許されていたことになります。では、「あわてなければならぬ事情」とはいったいなんなのでしょう。

何にこの師走の町に行く烏（からす） 松尾芭蕉

という句があります。松尾芭蕉の句の中で「師走」という季語を使った俳句として有名なものです。「からすが師走で賑わっている街中に行こうとしている。このカラス何のために人ごみめがけて出かけていくのだろうか。」という意味で、カラスに見立てた芭蕉自身が、本来ならば世俗を断ち切って俳句の世界にいるはずなのに、町の中に入ってゆくという、師走ならではの世俗と自分の間の関係が変わってくることを詠んでいる句です。

さて、この俳句、なぜ「烏」なのでしょう。

ここで突然ですが、上方落語の古典落語中に「三枚起請」というものがあります。最近ドラマでも話題になったのでご存知の方がいるかもしれません。

ある男が花魁に騙された。もう一人の男も騙されたという。どうしてだまされたかと聞けば、『年季が明けたらきつといっしょになる、神に誓って心変わりしない』という起請文も取ってあるらしい。「何々…【一つ、起請文のこと。私こと、来年三月年季があげ候えば、あなたさまと夫婦になること実証也。新吉原江戸町二丁目水都楼内、喜瀬川こと本名中山みつ】」相談を受けた隠居も同じ文面の起請文を持っていた。騙されたと思った男がこの花魁を連れてくる。そうすると、「大の男が三人も寄って、こんな事しか出来ないのかい。はばかりながら、女郎は客をだますのが商売さ。騙される方が馬鹿なんだよ」と言い負かされてしまう。ご隠居が、「昔からよく言うだろ？『徒な起請を一枚書けば、熊野の烏が三羽死ぬ』ってな」というと、「三千世界の烏を殺し主と朝寝がしてみたい」といって開き直るというオチである。このように書いてしまうと面白くもなんともないが、噺家さんの軽妙な話は、騙された男の滑稽さと花魁のしたたかさで、非常に面白い話である。

さて、この最後のオチである「三千世界の烏を殺し主と朝寝がしてみたい」は、高杉晋作が酒席で酔狂に作ったという都々逸が由来となっています。要するに高杉晋作の時代には、その前の『徒な起請を一枚書けば、熊野の烏が三羽死ぬ』という格言がすでに定着していたこととなります。

これは、烏がその色から「神の使い」と考えられていたことに由来します。烏は真っ黒で何の色にも染まりません。そのために、世俗の垢に染まったりほかの色に染められることなく、自分の判断で神の使いを行うことができる、だから烏は町の中にも平気で入っていて、何かがあれば、「カア、カア」と鳴いて神に知らせているというのです。そのように考えると、烏にかかわることは「不吉」とはいえ、多くは「人間の生死」にかかわることが多いことにお気づきでしょうか。

たとえば、頭の上で烏が輪を描きながら三回鳴いたら、その人は死ぬ、などという迷信がありますが、まさに、烏がその人の魂を神に知らせているというような感覚になっていたのです。

「烏は神の使い」という考え方は、特に熊野神社だけのものではありません。たとえば、広島の大島神社の宮司は、「烏」が決めます。これは宮司となる候補が、それぞれ烏の餌を作り、選挙の日一人ひとり船で海に出て、その餌を出す。一番初めに烏が飛びついた餌

を持った人が次の宮司になるということです。まさに、神の使いである烏が一番初めに信用し、その人の食を神の使いである烏が「共有」したことが、神の世界にもっとも近く、そして信頼された人ということになります。

このように、日本では古くから「烏は神の使い」というように考えられていました。昔の人は、起請文とは「神に誓って約束を果たす」ということを描いたものですから、いたずらや嘘で神様の約束をすると、神様に「うその報告をした」ということで、その使いである烏が三羽、罰が当たって殺されてしまう、ということになります。このように考えると、神様も厳しいですし、神の使いである烏もなかなか大変なのだと考えてしまいます。

「三千世界の烏を殺し主と朝寝がしてみたい」とは、まさに「烏は神の使い」ということから、神様の使いをすべて殺してしまい、不貞なことをしたい、要するに、それほど罰当たりなことでも、仕事を怠けてゆっくり休みたいというようなことなのでしょう。幕末の志士も、三枚起請に出てくる花魁も、世俗の中においてなかなか大変な毎日をおくっていたのかもしれませんが。

5 「師」はなぜ走らなければならないのか

さて、烏からもう一度松尾芭蕉の俳句に戻ってみましょう。

何にこの師走の町に行く烏（からす）

さて、烏は日本の場合、どんなに寒くても町の中に必ずいる鳥です。まさに、この句で歌われたもう一つの意味は、「師走で一年の総決算の時、神の使いである烏が何を見てどんなことを神に報告するのであろうか」というような解釈も存在します。その中において考えれば、「神様が見ている前で恥ずかしくないようにしっかりと新しい年を迎える準備をしなければならない」ということになります。単純に「新しい年を迎える準備」とは、まず「今年の総決算をして今年の垢を落とす」ということ、もう一つは、「すべてをきれいにして、新しい年を新しい形で迎えるように準備をすること」ということになります。まさに、「今年のこと」「来年の準備」を一緒に行わなければならないということになります。

今年やり残したことがないように、そして、今年のだめだったことは反省し、よかったことは世話になった人や神様、そして先祖にお礼をするということが、「今年のこと」ということになります。お坊さんが走らなければならないということは、まさに「今年の感謝、そして来年もよろしく願いますという気持ち」を伝える役目を各家庭で行わなければならないということになるからです。

一方、新しい年というのは、日本人の場合「新しい年の神様」というような感じで考えています。これは日本人が稲を中心にした文化を育んできたために、「稲」のように毎年苗から稲穂までの期間育つということになります。種もみということで継続はしますが、しかし、それが育つ過程はまた新たな年が行うということになるのです。

神様は、非常にきれい好きですし、穢れたものを非常に嫌います。また「暦」は、毎年

毎年、新しくするものです。そこで、新たな一年として、暦を新しくするときに、そこが穢れていては神様が「福」を持ってこなくなってしまう。とはいえ、家などを毎年建て替えることはできません、伊勢神宮でも20年に一度しか式年遷宮をしないのですから、人間が毎年家を変えることはできません。そこで、神様が来てもよいように、いつ福の神が来ても長くいていただけるように、人間は家の中を掃除し、毎年伝えてゆくもの、そして新しくするものを分けて、きれいにするのです。

暦を新しくするのは、日本では、というよりは農耕民族の間では太陽と月、そして、農作物の成長の季節を知るためということになります。その意味で、日本では伊勢神宮、要するに天照大御神を中心にした八百万の神々すべてに、一年の感謝の意を示し、そして新しい「暦」を迎えるために、きれいにするのです。

今年も一年ありがとうございました。皆さんにお読みいただいて非常にありがたく思っています。来年、新たに暦になりまして、また新たに日本の精神文化と一緒に勉強したいと思います。